

各分野で定着してきたローマ字表記の慣用の整理に当たって(案)

国語施策としての望ましいローマ字のつづり方を念頭に置きつつ、現状を踏まえた最適解を示すという観点から、規範性と寛容性のバランスをとるよう検討する。

各分野におけるローマ字表記の慣用の例（原則と異なるもの）

- ・ 外国語の慣用に合わせ又は国際的に通用する語として用いられることのある書き方
〔例〕 Tokyo 東京 tofu 豆腐 judo 柔道
- ・ 個人の姓名などに用いられる書き方（長音の「h」）
〔例〕 Ohno 大野 Satoh 佐藤
- ・ ヘボン式ローマ字に見られる慣用（撥音の「m」、促音の「t」）
〔例〕 Shimbashi 新橋 samma サンマ tempura 天ぷら
Botchan 坊っちゃん（書名） matcha 抹茶

整理の考え方

1 個人の姓名、団体名等の書き表し方

- 当事者の意思を踏まえたものとする。
→ つづり方は、固有名詞をローマ字でつづる場合にも使用することを想定。ただし、個人の姓名や団体名等をどのように書き表すかについては、当事者の意思を尊重する。

2 各分野における取扱い

- 各分野における取扱い
→ 社会的混乱を招くことのないよう、これまで各分野において定着してきた表記の使用を妨げないようにする。
- 外国語（特に英語）の文脈等における日本語、国際的に通用している表記
→ 外国語における表記や国際的に通用している表記にまで直ちに及ぼそうとするものではないが、参考とされることを想定して検討する。

3 そのほか、関連する論点

- 特殊な音（主に外来語の表記に用いる音）の書き表し方
→ 現行内閣告示においては「自由」とされている。各分野においては、次のような例があるが、これまで統一的な定めはない。

〔例〕 旅券における「ヘボン式ローマ字綴方表」

※参考

シェ	SHIE	チェ	CHIE	ティ	TEI	ニイ	NII	ニエ	NIE
ファ	FUA	フィ	FUI	フェ	FUE	フォ	FUO	ジェ	JIE
ディ	DEI	デュ	DEYU	ウィ	UI	ウエ	UE	ウォ	UO
ヴァ	BA	ヴィ	BI	ヴ	BU	ヴェ	BE	ヴォ	BO
ヴァ	BUA	ヴィ	BUI			ヴェ	BUE	ヴォ	BUO

※注意 「ヴァ:VA」「ヴィ:VI」「ヴ:VU」「ヴェ:VE」「ヴォ:VO」は使用不可

〔例〕「改訂 ローマ字教育の指針 解説」(文部省監修 昭和 25 年 文教協会)

「Ⅲ 文部省著作ローマ字教科書の表記法 補注 標準式(ヘボン式)のつづり方」から

〔備考〕 特殊な音の書き表わし方については自由であるが、文部省著作教科書では、だいたい次のように書き表わしてある。

si (スイ)	she (シェ)	je (ジェ)	che (チェ)
ti (ティ)	tsa (ツァ)	tsi (ツイ)	tse (ツェ)
di (ディ)	tso (ツォ)	dii・dii・tii	ディー・ディー・ティー
fa (ファ)	firumu	フィルム	Sovietto
fi (フィ)	Noruwê	ノルウェー	ソヴィエット
fe (フェ)	Paragwai	パラグワイ	
fo (フォ)	shepâdo	シェパード	shantse
va (ヴァ)			シャンツェ
vi (ヴィ)			
vu (ヴ)			
ve (ヴェ)			
vo (ヴォ)			
wi (ウィ)			
we (ウエ)			
wo (ウォ)			
kwa (クワ)			
gwa (グワ)			

○ ハイフン(「-」)の用い方

→ 複数の語によって構成される語を書く際に、ハイフンを用いる。

〔例〕 sotsugyō-shiki 卒業式 Unryū-gata 雲竜型 Meiji-dōri 明治通り

○ ローマ字で文を書く場合の留意点(現行では文頭の大文字化についてのみ言及)

→ 主に名詞など語のレベルでの使用を想定するものであるが、文を書く場合に必要な情報についても、言及すべきか。

- 〔例〕
- ・ 文を書く場合、書き始めの語頭は大文字で書く。
 - ・ 区切り符号には、コンマ(「,」)とピリオド(「.」)を用いる。
 - ・ 助詞の「～は」、「～へ」及び「～を」は、それぞれ「～wa」、「～e」及び「～o」と書く。